AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2013.03) 平成23年度:133.

精神疾患患者に対する痛みのアセスメント方法に関する検討

齊藤若菜、定廣和香子、檜山明子、守村　洋

精神疾患患者に対する痛みのアセスメント方法に関する検討

旭川医科大学病院、札幌市立大学看護学部　　齊藤　若菜、定廣　和香子、檜山　明子、守村　洋

【目的】

精神疾患患者の痛みを判断するために看護師が実践しているアセスメント方法の特徴を明らかにする。

【研究方法】

精神看護学領域での臨床経験が５年以上で精神科病棟に勤務する看護師５名を対象に、半構成的面接法を行った。面接は予備面接を行い、質問内容を評価し、必要箇所を修正した上で実施した。対象者には、精神疾患患者に対する痛みのアセスメントを行う際に、注目する点、困難と感じる点とその対処行動、最終的に痛みがあると判断するために重要な視点について質問した。面接は2010年７～９月に行った。データの分析方法は逐語録を質的データとし、Berelson,B. の内容分析を参考に帰納的に分析した。「精神科看護師は精神疾患患者の痛みをアセスメントするために何をしているか」について内容の共通性と相違を比較して、コード化し、さらに共通の意味を持つコードを集めてカテゴリー化した。コード・カテゴリーを元に精神疾患患者に対する痛みのアセスメントの実際を検討した。

【倫理的配慮】

本研究は、研究者の所属する研究倫理委員会の承認を得て行った。対象者には、研究の趣旨、プライバシー・匿名性の確保、研究協力への自由意志の尊重について文書と口頭で説明し、署名にて同意を得た。

【結果】

対象者の精神科病棟勤務年数は 13 ～ 21 年（平均 16.6 年）であった。他病棟での勤務経験については、経験のない者が３名、経験のある者が２名であった。面接の所要時間は平均 24 分であった。分析の結果、抽出した７カテゴリーを＜＞で示した。**＜バイタルサイン、生理機能、一般状態、表情、精神状態、生活状況を観察し、患者の全体像を把握する＞**看護師は排泄状況、歩行状況といった客観的情報に着目して観察していた。また、身体状態をふまえて精神状態の観察をしていた。**＜データを確認し、データをもとに観察を行う＞**看護師は、患者からの訴えではわからないときにデータを確認し、データをもとに精神疾患患者の痛みの観察を行っていた。**＜介助や鎮痛薬の受け入れ状況を通して、痛みの有無を確認する＞**看護師は、精神疾患患者に対し積極的に介助を行ったり、鎮痛薬使用を提案し、それらの受け入れ状況を通して痛みの有無を確認していた。**＜患者をみて自分が感じた疑問を聞き、痛みの有無を確認する＞**看護師は、精神疾患患者の様子を観察して自分が感じた疑問を精神疾患患者に伝えることで痛みの有無を確認していた。**＜普段の活動性や類似ケースと比較し、自身の勘と察知する力を動員して、普段と異なる些細な変化を見つける＞**看護師は、精神疾患患者の普段の活動性や類似ケースと比較し、自身の勘と察知する力を動員して、いつもと異なるところはないか頭から足の先まで観察し、普段の生活の中で些細な変化をとらえていた。**＜訴えられない理由を理解し、痛みや患者の本当に訴えたいことを聴いて訴えを受け止める＞**看護師は、精神疾患患者の苦しみや本当に訴えたいことを聴き、痛みにつながる患者の訴えを受け止めるという行為を行っていた。**＜自分と他スタッフの違いを理解した上で、スタッフと情報を共有する＞**看護師は、精神疾患患者の普段と痛みがあるときの違いをみるために、自分と他スタッフの視点が異なることを理解した上でスタッフと情報を共有し、共通の患者像を持つようにしていた。

【考察・結論】

精神疾患患者に対する痛みのアセスメントを行う際に、看護師は患者やスタッフとのコミュニケーションを通して、身体面・精神面の観察やデータの確認といった看護一般におけるアセスメントの基本に基づき、統合的に痛みのアセスメントを行っていた。また、痛みが自分でうまく表現できないという精神疾患患者の特徴を踏まえて、精神疾患患者に対して痛みの確認方法を工夫したり、客観的情報から痛みの有無を予測し、痛みのアセスメントを行っていた。